The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世仏教圏に於ける言説の形成と展開に関する研究
Author(s)	中山, 一麿
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46566
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【21】

氏　　名	中山一麿（なかやまかずまろ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　19947　号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	**中世仏教圏に於ける言説の形成と展開に関する研究**
論文審査委員	（主査） 助教授　荒木　浩 （副査） 教　授　後藤　昭雄　　教　授　平　雅行

論文内容の要旨

本論文は第一章「中世文学の仏教享受」、第二章「言説の形成と展開」、第三章「随心院経蔵研究への展開」の三章からなる、400字詰め原稿用紙にしておよそ430枚ほどの論文である。

第一章は、「『徒然草』と『三部仮名抄』」と題する論文からなり、『徒然草』の疑心往生説をめぐって、先行研究を批判的に摂取しながら、浄土宗鎮西義一条派の向阿『三部仮名抄』との関連記述を分析し、『徒然草』が『三部仮名抄』を通じて『無量寿経』や善導『法事讃』を摂取した可能性に言及する。

第二章は第一節「寂後の明恵形象」と第二節「偽書の生成過程」から構成される。第一節は、三編の論文からなる。その前半二本の論文では、明恵の座禅観と魔道などをめぐる思想を語る重要な書とされてきた『邪正問答抄』が、実は『夢中問答集』の抜き書きに他ならないことを、先行研究を分析しつつ提示し、そのことを伝本類の博捜や目録の分析から確定する。そして同書の伝本を系統分類して、その書誌的研究を代表的伝本の比較翻刻を併せて成し遂げる（「明恵上人仮託偽書『邪正問答抄』とその伝本」及び「『邪正問答抄』解説と翻刻」）。同論には『邪正問答抄』の諸本の姿と『夢中問答集』の初期の流布と受容に関連性があることを示唆する提言もある。同節第三論文では、明恵が文殊から伝授されたという「持戒清浄印明」の諸伝本について、先行研究を摂取した上で、さらに新出資料の随心院本十種を中心的に詳細に分析紹介し、その伝授血脈を作成し、明恵教団の形成についてもいくつかの問題を提示する（「「持戒清浄印明」における相承と展開」）。同章第二節では、随心院所蔵の『即身成仏経』に着目し、『菩提心論』、また和製偽経とされる『宝悉地経』や『金輪呪王経』などとの関連を示して、『即身成仏経』が偽経であることを証す。また随心院本と異本の識語を詳細に分析して後醍醐の勅定に着目し、三宝院流偽書『石室』の識語との類似性を確認する。そして両書の識語に名前の見える「公育」に注目し、『即身成仏経』及び『石室』の作者に比定し、関連資料を紹介しながら、その伝記的輪郭を新たに描いてみせる（「三宝院流偽経生成の一端－随心院蔵『即身成仏経』とその周辺－」）。さらに関連研究として、偽書研究に重要な書である随心院蔵、蓮體編『録外秘密経軌目録』を翻刻紹介する（「附・『録外秘密経軌目録』」）。

第三章は、第二章の諸研究を承けて申請者が現在中心的役割を担って展開している随心院聖教研究の研究史の総括である。随心院の歴史的蔵経形成と他寺院とのネットワークについて、近代初期の旭雅の活動にも目を向けて、概観を示している（「随心院聖教類研究の現在と展望」及び「附・随心院関係参考文献目録」）。またそれらの理解に重要な経蔵目録をも翻刻紹介している（「随心院経蔵古目録類の紹介」）。

論文審査の結果の要旨

申請者の研究は、今日、日本文学の領域でも、諸学連携的になされている、寺院聖教研究の一翼をになうものである。随心院を中心に、申請者が行っている寺院調査は、現在いくつかが継続中であり、特にそのうちの随心院をめぐる総体的成果はここ数年の内に公表される計画であるが、第三章はその中間報告となっている。申請者の研究はそれら基礎作業を積み重ねた上で、偽書や三宝院流、また立川流など、これまで文学では本格的に論じられてこなかったが、今日むしろ不可欠な研究対象と成りつつある仏教の問題を正面から受け止め、論じている。「三宝院流偽経生成の一端ー随心院蔵『即身成仏経』とその周辺ー」はその最も重要な成果であろう。そこには後醍醐帝の政治体制と偽書・偽文書の発生や、南北朝の宗教環境と政治の問題に示唆的な指摘もある。また申請者が紹介した〈古目録類〉については、今日また研究史的関心事である、「偽書」研究にも寄与するところが多く、「持戒清浄印明」の伝授系譜の博捜と血脈の再現は、明恵教団の形成と展開、またその言説形成（高山寺山内と山外への伝授と内容の異なりの注目など）についても、重要な示唆を与えるものである。『邪正問答抄』が、『夢中問答集』の抜粋であることを、諸本のさまざまな分析から論じた上で、それが『夢中問答集』の古い享受のあり方の反映であることを示唆する第二章も重要である。総じて、本論文タイトルに言う、中世の言説形成の一端を、詳細な文献学的研究として示した意義ある研究を含んでいる。

一方、言説研究は必ずしもいわゆる「文学」研究に還元されるものではなく、本論文の「はじめに」で述べる「今後の文学研究の幅を広げる」という提言は、本論の中で必ずしも果たされてはいない。第一章が『徒然草』の単行一論文であることにも象徴される、本研究の帰着点の問題はのこるであろう。また、論文の文章力、分析言語の表現力については、今後の研鑽を強く望みたいところもある。

だが、本論の達成の延長線上にある、共同研究を推進する申請者の研究活動によって切り開かれている寺院研究とその成果、特に、申請者が現在共同研究として地道に進めている随心院を軸とする聖教研究とその識語分析から導き出される研究成果は、大きな研究的意味が期待されるものである。本論文の達成がそのことをより期待させる。本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。